八月十五日　戦争終わる

平成23年12月3日　高根台公民館

日本の終戦を決めた歴史的な御前会議は、昭和二十年八月十四日午前十時五十分から、宮中の地下防空壕で開かれました。それにしても、ここまで来るのに、何と時間のかかったことでしょうか。内大臣の木戸幸一は、戦後GHQ連合軍総司令部の「日本の終戦努力を通じて、最も重大と感じた時機はいつか」。この質問に対して「八月十二日から十五日迄の間、殊に十三日なりき」と答えていますが、十日未明の御前会議で終戦の聖断が出ていたのに、それが二度目の聖断を必要とすることになったのは、「ポツダム宣言」受諾通告に対するアメリカ国務長官バーンズの回答をめぐって、大きな揺り戻しが起きていたからなのです。

「バーンズ回答」で問題になったのは、まず「降伏ノ時ヨリ天皇及日本国政府ノ国家統治ノ権限ハ連合軍最高司令官ニsubject to」となっていることでした。そのまま訳せば、「従属」または「服属」になります。外務省は国体論者を刺激しないように、「制限ノ下ニ置カルルモノトス」と穏やかな表現にしましたが、陸軍は「隷属する」と最も衝撃的な翻訳です。もう一つは「最終的ノ日本国政府ノ形態ハ日本国国民ノ自由ニ表明セル意思ニ従ヒ決定セラルベキモノトス」。徹底抗戦派は「天皇統治の大権を認めておらず、国体の本義に反する人民政府を認めている」。これでは国体護持、つまり天皇制は守れないと、勢いづいたのです。

しかし、昭和天皇の終戦の決意は、もう不動でした。十二日の午後、木戸が拝謁して、こうした見解を申し上げたところ、「それは問題にする必要はない」と言われたのです。「もし、国民の気持ちが皇室から離れてしまっているならば、たとえ連合国側から認められても、皇室は安泰ということにはならない。反対に国民が依然皇室を信頼してくれるのなら、それを国民が自由に表明することによって、皇室の安泰も一層決定的になる。これらの点をハッキリ国民の自由意思の表明によって決めてもらうことは、良いことだと思う」。木戸は「煩悶は一時に消え、私はパッと眼が開いたような気持ちになりました」と言っていますが、天皇は天皇制の維持とか皇室の安泰などをはるかに超えて、国家や民族の根幹を残すことを考えておられたのです。木戸は夜九時半、鈴木貫太郎首相を呼び出して天皇の言葉を伝え、「たとえ、国内に動乱等起こる心配ありとも終戦断行」。この意見で、二人は一致したのです。

十三日朝の最高戦争指導会議は、聖断に従い「ポツダム宣言」受諾を主張する鈴木首相、東郷茂徳外相、米内光政海相。これに対して「これでは国体護持が保

障されない。再度照会すべきだ」とする阿南惟幾陸相、梅津美治郎参謀総長、豊田副武軍令部総長と、三対三で対立したまま纏まりません。午後四時からの閣議も、受諾に賛成は総理一任を含め十三人、反対が阿南陸相、松阪広政法相、安倍源基内相の三人で、閣内の意見一致を見るに至りませんでした。ここで鈴木首相は、終戦へ向けて確固たる決意を示したのです。「陛下がご聖断をお下しになったのは、もっと高いところから、日本という国を保存し、日本国民を労わるという広大な思召しによるものと拝察する。私は、このご聖断のとおり戦争を終結せしむべきものと考えるが、今日の閣議の模様をありのままに申し上げて、明日重ねて聖断を仰ぐ所存であります」

重ねての聖断を予告し、十四日午前十時から臨時閣議を開くことにして、閣議は解散しましたが、問題はその御前会議をどうやって開くかです。御前会議の奏請には、奏請状に首相のほか両総長の署名、花押が必要でした。十日未明の時は内閣書記官長の迫水久常が手回しよく、期日未記入の奏請状に二人の署名、花押をとっておいたので開けましたが、今度はそうはいきません。両総長とも再照会論で、御前会議開催には反対していましたから、通常の手続きでは両総長の署名が得られないことは明らかです。

十四日の朝、内大臣の木戸が愕然としたのは、侍従が持って来た一枚の宣伝ビラでした。B29が空から撒いたもので、降伏の交渉条件が日本語で書き並べてあるのです。これを全国の軍隊が読んだら、どんなことになるか。軍部の大規模反乱は必至であり、その前に終戦を断行しなければ…。そう思って、午前八時半に参内し御前会議開催をお願いしたのですが、天皇も「すぐ首相と相談せよ」と言われます。そこへ鈴木首相が参内して来たので、二人で一緒に拝謁して、最高戦争指導会議と閣僚の合同会議を、それも「天皇直々のお召」という前例のない形で開くことにしたのです。首相官邸には、臨時閣議出席のためすでに閣僚が集まっていましたが、直ちに全閣僚、それに統帥部の両総長、枢密院議長の平沼騏一郎に「天皇のお召である」として、「平服にて差し支えなし、午前十時半までに吹上御苑に参集せよ」との呼び出しがかけられました。真夏の暑い閣議の積もりで、ノー・ネクタイの閣僚もいましたが、秘書官のネクタイを借りて、あたふたと皇居へ駆け付けたのだそうです。

天皇は、それに先立って午前十時から元帥会議を開き、海軍の永野修身、陸軍の第一総軍司令官杉山元、第二総軍司令官畑俊六の三元帥から、意見を聞かれました。永野は「軍はなお余力を有し、且士気も旺盛なれば、続いて抗戦して上陸せる米軍を断固撃攘すべきであります」と、徹底抗戦論を述べたことが記録に残っています。杉山も同意し、畑は「たとえポツダム宣言を受諾するにしても、十個師団を天皇の親衛隊として残すよう努力する必要があります」。こう奉答していますが、元帥という軍人最高の地位にありながら、戦局の実情も陸海軍戦力の

空洞化も全く分かっていないのです。杉山と永野は開戦時の参謀総長、軍令部総長で、世界と日本の力関係について、この程度の認識しかなかったことが、開戦という誤った判断につながったわけです。しかし天皇は、はっきり「戦争を終結することに決意したから、軍はこれに服従すべし」と、大元帥命令を下されたのです。

異例の御前会議は、午前十時五十分から始まりました。会議室は地下十畳の小さな部屋です。参列者が二十三人と多いので、天皇の前に机が置かれただけで机は取り除かれ、玉座に面して三列の椅子に座りました。まず鈴木首相が第一回聖断以来の経過を報告し、「ここに重ねて聖断を煩わし奉るのは、罪軽からざることをお詫び申し上げます。しかし、意見はついに一致を見ませんでした。この席において反対の意見ある者より親しくお聞き取りのうえ、重ねて何分のご聖断を仰ぎたく存じます」。そして指名により梅津、豊田、阿南の順で、それぞれ声を振り絞るようにして国体護持に対する不安、再度照会の必要を訴えました。しばらく沈黙が続きましたが、天皇は「ほかに意見がなければ私の考えを述べる」と静かに口を開かれ、二度目の「聖断」を下されたのです。

情報局総裁の下村宏が会議の後、大急ぎで心覚えをメモし、「終戦記」に書き残していますので、天皇の言葉をそのまま再現しますと、次のようです。「反対側の意見はそれぞれ能く聞いたが私の考は此前申したことに変りはない。私は世界の現状と国内の事情とを充分検討した結果、これ以上戦争を継続することは無理だと考へる。国体問題に就て色々疑義があると云ふことであるが私は此回答文の文意を通じて先方は相当好意を持って居るものと解釈する。先方の態度に一抹の不安があると云ふのも一応は尤もだが私はそうは疑ひたくない。要は我国民全体の信念と覚悟の問題であると思ふから、此際先方の申入を受諾して宜しいと考へる、どうか皆もさう考へて貰ひたい。更に陸海軍の将兵にとって武装の解除なり保障占領と云ふ様なことは誠に堪へ難いことで夫等の心持は私には良くわかる」

ここで天皇は、「しかし自分は如何にならうとも万民の生命を助けたい」と言われたのです。「此上戦争を続けて結局我邦が全く焦土となり万民にこれ以上の苦悩を嘗めさせることは私としては実に忍び難い。祖宗の霊にもお応へが出来ない。和平の手段によるとしても素より先方の遣り方に全幅の信頼を措き難いことは当然ではあるが、日本が全く無くなるといふ結果にくらべて、少しでも種子が残りさへすれば更に又復興と云ふ光明も考へられる」。真情をこめて、途切れ途切れに話される天皇。その頬には涙が流れ、満堂声なく、啜り泣く声だけが聞こえたと言われます。

天皇は言葉を続けられました。「私は明治大帝が涙を呑んで思ひ切られたる三国干渉当時の御苦衷をしのび、此際耐へ難きを耐へ、忍び難きを忍び一致協力、将来の回復に立ち直りたいと思ふ。今日まで戦場に在て陣没し或は殉職して非命

に斃れたる者、又其遺族を思ふときは悲嘆に堪へぬ次第である。又戦傷を負ひ戦災を蒙り家業を失ひたる者の生活に至りては私の深く心配する所である。此際私としてなすべきことがあれば何でも厭はない。国民に呼びかけることが良ければ私は何時でも「マイク」の前にも立つ。一般国民には今まで何にも知らせずに居ったのであるから突然此決定を聞く場合動揺も激しいであらう。陸海軍将兵に更に動揺も大きいであらう。この気持をなだめることは相当困難なことであらうが、どうか私の心持をよく理解して陸海軍大臣は共に努力し、良く治まる様にして貰ひたい。必要あらば自分が親しく説き諭してもかまはない。此際詔書を出す必要もあらうから政府は早速其起案をしてもらひたい。以上は私の考である」

天皇の言葉が終わっても、しばらく顔を上げる者もなく、みんな椅子に金縛りのようになっていましたが、やがて鈴木首相が立ち上がり、終戦の詔勅案奉呈の旨を述べ、繰り返し聖断を煩わしたことをお詫びして、深々と頭を下げました。時刻は正午。天皇が退出されると、和平派も戦争継続派も、みんな泣いていました。子供のようにオイオイ声を上げて泣き出す者、両拳をしっかり握り締めてひたすら耐えている者もいましたし、床の上に両手をついて泣いている者もいました。

こうして、昭和天皇と鈴木首相、木戸内大臣の阿吽の呼吸により、通常の国家意思決定の手続きを超越して終戦の決断が下されたのです。しかし、憲法の規定では聖断はあくまで天皇の意思表示であって、それが国家の決定になるには、内閣がそれに基づいて全員一致で決議し、改めて天皇の裁可を得てということになります。ですから終戦の詔書にたとえ一人でも閣僚が副署しないと、詔書は出せませんし、内閣も潰れます。木戸は「こういう点になると、天皇の力は大きかった。我々和平派はこれを聖断という形で最大限に利用した」。こう話していますが、政府は午後一時から臨時閣議を開いて終戦に関する手続きに入ったのです。

大本営はこの十四日午前十時三十分、「我航空部隊は十三日午後、鹿島灘東方で航空母艦及巡洋艦各一隻を大破炎上せしめたり」と発表しています。現代史研究家の保阪正康さんによると、これが昭和十六年十二月八日の開戦日、「帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」。あの有名な放送以来八百四十回目、戦況報道としては最後の「大本営発表」なんだそうですが、第一線部隊はまだ聖断を知りませんから、徹底抗戦の構えをとっています。本当なら「大元帥命令」が出た時点で、戦闘行動の停止命令を出すべきだったのでしょうが、上層部の対応が遅れたため無用な犠牲を出すことになりました。翌日の十五日になっても、百里原基地から海軍特攻隊の「彗星」八機、木更津基地からは「流星」一機が出撃し、関東東方海上で十八人も戦死しているのです。

それに引き替え、天皇は終戦で国内を纏めるには、何でもする決意をされていました。綜合計画局長官の池田純久陸軍中将が御前会議が終わって防空壕の外へ

出ると、侍従が飛んで来て「陛下が陸軍省、海軍省へ行って、若い将校たち皆に説明すると言われている」。池田が阿南陸相に取り次ぐと、「もうご聖断が下ったんだから、自分が全責任を持つからご安心願いたいと奉答してくれ」。米内海相も「陸海軍のことは我々でしっかり統帥致します」との答えです。しかし、陸軍若手将校の宮城乱入事件、海軍厚木基地の反乱が起きたことを考えると、ここは天皇の力を最大限に生かして、陸海軍をきちっと統制すべきでした。それに阿南自身、まだその気持ちは揺れていたようです。秘書官をしていた林三郎大佐の話では、御前会議の後「最後の相談だが、お前の意見を聞きたい」と阿南に呼ばれ、「情報では、東京近海にアメリカの大輸送船団が来ているということだ。今、それを叩いてから終戦に持って行く考えはどうだろうか」。林が驚いて「終戦の聖断が下っており、思い付きは絶対にいけない」と言うと、すぐ思い直したそうですが、このまま戦争を止めるのは残念だ、何とか敵に一撃を加えて、少しでも有利な講和にというのは、阿南だけではなく、多くの陸海軍将兵の気持ちだったのでしょう。

陸軍省に戻った阿南は、大会議室に省内の全将校を集めて訓示しました。「軍は一体となり、整斉と終戦処理に邁進し、混乱なからしめること。外地に残された数百万の軍人、同胞の引き揚げと復員に全力を尽くすべきこと」。静まり返った中で、突然号泣が起こりました。軍務課の畑中健二少佐です。軍事課の井田正孝中佐が「大臣閣下、決心変更の理由を承りたい」と質問すると、阿南は込み上げる胸のうちを押し隠すように、しばらく瞑目していましたが、こう切り出しました。「陛下御自らのお言葉に対しては、自分としてはこれ以上お返しする術がなかった。特別に陛下からこの阿南に対し、我慢してくれと涙を流されたお姿を拝しては、全てを投げ棄ててお受けする外に道はなかった」

阿南は中佐の時、昭和四年八月から四年間侍従武官を務めています。鈴木首相の侍従長時代とも重なっているわけですが、昭和天皇も普通は「陸軍大臣」と官職名で呼ぶところを、阿南だけは、それも「アナン」と親しみをこめて名前を呼ばれていました。そしてこの天皇の涙が、人一倍天皇を慕っている阿南に、辞表提出や詔書への副署拒否といった、鈴木内閣倒閣の手段を思い止まらせたように思います。この後、それでも納まらない二、三十人の将校が大臣室に押し掛けると、阿南は「戦争は止めたんだ。ガタガタするな」と、怒鳴り付けたそうです。

参謀本部にも激震が走りました。参謀次長の河辺虎四郎中将は、目を血走らせ泣きながら行き交う将校を見て、「本土決戦の作戦ばかりを考えていたが、聖断が下った以上は降伏を混乱なく実行することだ。それには、陸軍首脳の気持ちをはっきり固めることだ」。そう考えて陸軍次官の若松只一中将と相談して、「陸軍ノ方針」と題する誓約書を作成したのです。「陸軍ハ飽迄御聖断ニ従ヒ行動ス 八月十四日十四時四十分」。誓約の時間を確認するため時刻も記入しましたが、陸

軍首脳会議に集まっていた梅津参謀総長、畑、杉山元帥、教育総監の土肥原賢二大将、さらには閣議から戻って来た阿南も署名しました。また梅津の「航空部隊の者がざわつく心配が一番多いから、航空総軍司令官にもこれを見せておいた方がいいぞ」。この注意で河辺正三大将からも署名をとりましたが、河辺はパイロットが暴走しないように、飛行機の燃料を抜くなどの措置をとったそうです。

そして、この「陸軍ノ方針」をいち早く固めたことが、やがて宮城乱入事件が発生した際、「承詔必謹に反する行為」として全陸軍の支持を得ることが出来ず、大事に至らずに終息させる大きな要因となったのです。陸軍はこの後、陸軍機密電報で「帝国の戦争終結に関する件」を大臣、総長名で各軍司令官に打電しています。「聖断下る」として、全軍挙って大御心に従い行動すること、一兵に至る迄断じて軽挙妄動することのないよう戒め、「小官等は万斛の涙を呑んで之を伝達す。右に関する詔書は明十五日発布せられ特に正午陛下自らラジオに依り之を放送し給う予定なるを以て大御心の程具に御拝察願う」。こう結んでいました。

玉音放送が閣議で正式に決定されたのは、十四日午後四時頃でした。この天皇の放送という日本の歴史上初めてのアイデアは、前にもお話しましたが情報局次長の久富達夫が八月一日、下村総裁に「混乱なく終戦に導くには、陛下自らマイクの前に立って、国民にじかに終戦を宣言されるのが一番いいのではないか」。こう意見具申したことに始まります。下村が八日に拝謁してお願いすると、天皇もすぐ同意されていましたが、内大臣木戸の十一日の日記には下村が進言したのでしょう。宮内大臣の石渡荘太郎とラジオ放送について懇談したこと、そして拝謁して「ラジオの件に対する聖上の思召は何時にても実行すべしとの御考へなる旨を伝ふ」とあります。広島、長崎の原爆、ソ連参戦で敗戦はもう必至だったとはいえ、軍部がまだ「本土決戦、一億玉砕」を声高に叫んでいる時、それが急転直下、日本人にとっては初めての経験となる無条件降伏を、大した混乱もなく受け入れることが出来た点で、この玉音放送が果たした効果は絶大だったと、言ってもいいでしょう。

閣議は、終戦詔書の作成を急ぎました。草案となったものは、書記官長の迫水が十一日から起草にかかっていたもので、この終戦詔書最大の特徴は、御前会議での天皇の発言を出来るだけ採り入れようとしたことです。迫水のお父さんが傷痍軍人で、何もすることがないものですから、小さい時から漢文を徹底して教え込まれたのだそうですが、最終的には大東亜省の顧問をしていた漢学者安岡正篤に文法や表現について助言、訂正を求めました。詔書の白眉とも言うべき「万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」。この言葉は、安岡が中国の古典から引用したものです。迫水が多くの戦死、殉職者、その遺族に対する天皇の思いを、「断腸の思いあり」としたところ、安岡からこう注意されたと言うのです。「君、断腸の思いというのは、男女間の離別の時に、胸が裂けるようだという意味で使うんだ。こ

ういう時に適当でない」と、「五内為ニ裂ク」と改められました。五つの内臓、つまり体中が裂けるという意味なんでしょうが、私たち無学の者には「断腸の思い」の方が分かりやすい感じもしますが…。

五時間に及んだ閣議では、タイプで打った草案がガリ版刷りにして配られ、加筆・削除が合計四十五か所、文字数にして百六十三字になりました。安岡は「今戦争を終結するのは正しい筋道である」。この見地を示すため、「義命ノ存スル所」としたのですが、これは中国の「春秋左氏伝」、「信以て義を行ひ、義以て命をなす」から採った言葉なんだそうです。ところが閣議では、難解だとして「時運ノ趨ク所」と訂正されました。安岡は「無学の人ほど度し難いものはない」と、ため息をついたと言われますが、迫水が戦後、池田内閣の閣僚になった時、こう言ったそうです。「近頃の政治には理想がなく、筋道がなく、全く行き当たりばったりのようだが、それというのも、あなた方が終戦の詔書の『義命』を『時運』に訂正したことから始まったと言えますよ。時運の趨く所というのは、時の運びでそうなってしまったから、仕方なく、ということで、理想も筋道もなく、行き当たりばったりということです。目前の損得ということです。あなたも政治家として立たれる以上、時運派にならないで、義命派になって下さい」と。

第三節中ほどの「戦局必スシモ好転セス」は、原案では「戦勢日ニ非ナリ」となっていたのが、阿南陸相の強硬な要求で改められたものです。「負けてしまったのではない。ただ現在、好転しないだけの話だ」と主張し、米内海相は「明らかに負けている」と反駁しましたが、若手将校の突き上げで、阿南の苦しい立場を知っている鈴木首相は、その要求を入れました。また第五節冒頭は「朕ハ常ニ神器ヲ奉シテ爾臣民ト共ニ在リ」としていましたが、連合国側に無用な詮索を招くのではないかとの懸念が出て、神器を削除し、阿南の意見で「国体ヲ護持シ得テ」としました。これによって、国体護持の確信を、こちらから表明することにしたんだそうです。こうして詔書が出来上がり、鈴木首相以下全閣僚が副署したのは午後八時半頃です。天皇が署名し、御璽を捺されて内閣へ返され、終戦を告げる詔書は午後十一時、発布の一切の手続きを終わりました。同時に連合国に宛てて「ポツダム宣言」受諾の電報が、スイス公使経由で発送されたのです。

この詔書を天皇自身の朗読によって全国に布告するため、玉音放送の録音は午後十一時二十分から、宮内省二階の天皇政務室で始まりました。大きな奉書に書かれた放送用の言葉書きは、紙が柔らかいため、天皇が持ちやすいように板で裏打ちし、また読みやすいように朱筆で句読点を入れたんだそうです。天皇が読み進むうち、「非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヒヲ致セハ五内為ニ裂ク」。この箇所でしばらく絶句し、再び声を励ますように続けられたのを、宮内省総務課長の筧素彦は「居たたまれない気持ちで見守った」と言っています。一回目は声が低かったため、二回目が行なわれ、二組四枚の録音盤は侍従職で預かることになりま

したが、十五日の放送で使われたのは二回目のものです。普通なら御座所の部屋に保管するところですが、侍従の徳川義寛は「とにかく安全には、目立たない所がいい」。そう考えて、皇后宮事務官室に持って行きました。ここは女官室で、壁ぎわにロッカーのような軽金庫があり、辺りには書類などもいっぱいあって目立ちません。その軽金庫に何気なくといった感じで納めたことが、やがて宮城に乱入した兵隊たちの執拗な捜索から、録音盤を守ることになるのです。

夜十一時過ぎ閣議が終わり、解散しようとした時、阿南陸相が軍刀をつり、軍帽を小脇に抱えて鈴木首相の所へ来て、直立不動の姿勢でこう言います。「終戦の議が起こりまして以来、色々申し上げましたが、総理にご迷惑をおかけしたことと思い、ここに謹んでお詫び申し上げます。私の真意は、一に国体を護持せんとするにあったのでありまして、敢えて他意のあるものではありません。この点は何とぞご了解下さいますように」。鈴木は阿南を労わるように、その肩に手をかけ、「そのことはよく分かっております。私こそ、あなたの率直な意見を心から感謝しておりました。みな国を思う誠の情から出たものなのです。しかし阿南さん、日本の皇室は絶対にご安泰ですよ。陛下のことは心配いりません」と言うと、阿南も「私もそう信じます」。そして新聞紙に包んだ葉巻の箱を鈴木に渡して、「南方戦線から届いた品ですが、自分は吸いませんから、総理大臣でお使い下さい」と言って、敬礼して立ち去りました。迫水が見送って総理室に戻ると、鈴木は静かに「阿南君は暇乞いに来たのだね」と言ったそうです。

しかし、クーデターは発生しました。「降伏絶対反対」に取り憑かれた若手将校たちの、狂信の根は深かったのです。陸軍省軍務局の竹下正彦中佐、この人は阿南の義弟ですが、椎崎二郎中佐、井田中佐、畑中少佐。みんな皇国史観の熱狂的な指導者平泉澄東大教授の門下生です。彼らが立てた計画では、天皇を和平派要人から隔離し、戦争継続へ決意を翻してもらうため、東部軍と近衛師団の兵力を使用することになっていました。ただ、彼らの先輩で相談役にもなった軍事課長の荒尾興功大佐が、彼らが暴発しないように、クーデターに全国の部隊を追随させるという名目で、大臣、総長、東部軍司令官、近衛師団長、この「四者一致の上であること」を条件としたのです。それが十四日朝、梅津総長の反対がはっきりして「四者一致」の条件は崩れ、竹下と井田はこの段階で断念しました。

ところが畑中、椎崎はあきらめず、近衛師団を動かそうと自転車で走り回っていたのです。日付が十五日に変わろうとする午前零時頃、畑中が竹下、井田の所へ来て、こう言います。近衛歩兵第二連隊が宮城警護の配置につくことになっているので、午前二時を期して蹶起する。近衛師団参謀の古賀秀正少佐、石原貞吉少佐も同意している。古賀は東条英機元首相の娘婿ですが、「近衛師団長を説得しても聞き入れない時は、これを斬っても実行する」と言うのです。竹下が「成功の見込みは少なく、計画を中止しろ」と忠告しても、畑中は頑として聞きませ

ん。竹下は「近衛師団長と東部軍司令官の両者が起った場合には、阿南に対し力の限り蹶起を勧めよう」と約束し、陸相官邸に向かいました。井田の方は「近衛師団長を説得してほしい」と頼まれ、本人に言わせると「情誼もだしがたく」、畑中、椎崎と近衛師団司令部に行くことになりましたが、これには中央の動静を探ろうと、陸軍省に来ていた航空士官学校区隊長の上原重太郎大尉も同行したのです。

近衛第一師団長の森赳中将は、典型的な武人でした。畑中たちも「森は大命でない限り、たとえ大臣の命令でも絶対に起つことはないだろう」と見ていましたが、果たして「聖断が下った以上、断じて軽挙は許さぬ」と拒絶します。井田が参謀長の水谷一生大佐から説得してもらおうと、隣の参謀長室に行っていると、突然銃声がしました。驚いて廊下へ出ると、畑中が真っ青な顔で「時間がないのでやりました」。森が椅子から立ち上がったとたん、畑中の拳銃が火を噴き、上原大尉が軍刀で斬り付けたのです。かばおうとした第二総軍参謀の白石通教中佐も斬殺されましたが、元帥会議に出席する畑元帥に同行し、義兄の森を訪ねていてこの難に遇ったものでした。森は苦痛にうめきながら、「自重しなくてはならんぞ、自重しなくては…」と、低く戒めの言葉を残して絶命したと言われます。

古賀少佐による森師団長名の偽師団命令が出され、各連隊が動き出しました。畑中と椎崎は、宮城内を警護する第二連隊長芳賀豊次郎大佐の所へ車を走らせ、「自分たちは大本営から派遣された参謀だ」と偽り、外部との交通を遮断させたのです。兵隊たちの捜索が始まり、「内大臣はどこか、宮内大臣はどこか」。聞き回る声が聞かれましたが、徳川侍従は午前三時頃事件を知って、すぐ二人を金庫室と呼んでいる宮内省地下の防空壕に隠れさせ、入り口の前に書棚を置いて簡単には分からないようにしました。一方、録音を終えて皇居から出ようとした下村情報局総裁ら放送関係者も二重橋の詰所に監禁され、その尋問から録音盤がまだ宮中にあることを知ると、玉音放送を阻止しようと録音盤探しが始まったのです。徳川侍従は天皇の居られる御文庫へ急を知らせに行った帰り、将校に誰何され、三十分ほど押問答をしましたが、一人の将校が「斬れ」と言い放ちます。そして「大臣はじめ側近たちがけしからぬ。お前たちは日本精神を持っているのか」と言うので、「君たちだけが国を守っているのではない。国を守るためには、我々が力を合わせて行くべきだ」と言い返すと、いきなり右頬を殴られたそうです。

東部軍司令部が異変発生を知ったのは、午前二時頃でした。軍司令官の田中静壱大将は、直ちに軍命令を各連隊に伝達させました。近衛師団長が一部策動者に殺害され、近衛師団の指揮は別命あるまで東部軍司令官直接これをとること、先刻の師団命令は偽命令であり、即刻この命令を取り消すこと、そして「宮城警護部隊はその囲みを解くべし」と命じたのです。田中は午前五時、自動車で宮城内に入り、直接鎮圧に乗り出しました。歩兵第一連隊に到着した時、営庭には完全武装の一千人が整列、出動直前でしたが、そこに居合わせた参謀の石原少佐を逮

捕させました。さらに乾門で芳賀連隊長に第二連隊の配備を解かせると、宮城奥の御文庫まで進んで、侍従を通じて天皇に「軍司令官が参りました。もうご心配には及びません」と伝えたのです。

竹下中佐が午前一時頃陸相官邸に行くと、阿南は奥座敷の蚊帳の中で遺書を書いています。「自決は今夜でなくてもいいじゃないですか」と言うと、「十四日は父の命日だ。二十日も次男の命日だが、明日の陛下のご放送を聞くのは忍びないから、やはり今夜にしよう」。実際はもう十五日になっていたのに、遺書の日付が十四日だったのはそのせいでした。お膳に酒徳利とチーズが一皿置いてあり、二人で飲み出しましたが、二時頃宮城の方から銃声が聞こえます。そこで初めて畑中、椎崎の蹶起を伝えると、阿南は「近衛が蹶起したにしても、東部軍は動かぬだろう。東部軍が動かなければ大丈夫だ」と、動ずる風も見せません。それほど、田中軍司令官を信頼していました。竹下に親戚、知己、先輩、後輩に対する伝言を頼み、女中さんを呼んで次から次とグラスを飲み干します。やがて井田中佐と林秘書官が来て森師団長殺害を報告すると、「このことのお詫びも兼ねて自決するのだ」と言ったそうです。井田が「お供します」と言うと「死んじゃいかん、国に尽くせ」と言って五、六発殴り、二人で相擁して泣いていたと言われます。

午前四時近くになって自決の支度にかかり、純白の真新しいワイシャツに着替えました。侍従武官時代に天皇から拝領したものでした。広縁に座り、宮城の方を向いて腹を切り、喉のあたりを左手で撫でています。竹下が「介錯しましょうか」と言うと、「その必要はない」と短刀で右頸部を突き刺し、前のめりに倒れたのです。竹下が阿南の軍服を体の上にかけ、二通の遺書、「一死以て大罪を謝し奉る 神州不滅ヲ確信シツ、 陸軍大臣阿南惟幾」、そして「大君の深き恵に浴みし身は 言ひ遺すへき片言もなし」の辞世を広げて、傍に供えました。阿南の体がむくむく動いたため血が広がり、遺書は血塗れになりましたが、竹下が短刀をぐっと頸動脈深く切り込みました。検視では阿南の絶命は八時頃だったそうです。

事破れた畑中、椎崎は、放送局から国民に呼びかけようと、内幸町の放送会館に向かいました。朝五時のニュースの準備をしていた舘野守男アナウンサーからマイクを取り上げ、自分たちの真意を放送するように強要しましたが、放送局側から「警報発令中は、東部軍の許可なしには一切放送できない」と拒否され、放送に関する知識もないため、七時頃放送会館から出て行きました。こうして予定より二時間余りも遅れて午前七時二十一分、舘野アナウンサーの「謹んでお伝え致します。かしこきあたりにおかせられましては、このたび、詔書を渙発あらせられます。かしこくも天皇陛下におかせられましては、本日正午、おんみずから放送あそばされます」。この玉音放送予告が、街に流れ出したのです。

日米開戦の臨時ニュースを放送したのも、舘野でした。それから三年八か月、どんな思いだったでしょう。「国民は一人残らず、謹んで玉音を拝しますように」

と二度繰り返した後、昼間送電のない地方にも、正午には特別送電すること、官公署、事務所、工場や停車場、郵便局では、手持ちの受信機をできるだけ活用して、国民もれなく放送を聞けるよう手配してほしいこと。最後に「ありがたき放送は正午でございます」と二度繰り返した後、「なお、今日の新聞は都合により午後一時ごろ配達される所もあります」で放送を終わりましたが、この玉音予告放送は何度も何度も流されました。そして二組の録音盤は午前十時頃、万一を警戒して別々のルートで放送会館に届けられ、無事電波に乗ることになったのです。

畑中と椎崎は、玉音放送が始まる直前、宮城前で自分たちの志を訴えるビラを撒いた後、拳銃で自決しましたが、ビラには「純忠ノ大義二生キンノミ」とありました。古賀少佐も放送が終わった頃、近衛師団司令部の二階で拳銃自決しています。上原大尉はその朝、現在は航空自衛隊入間基地になっている航空士官学校に戻ると、生徒たちを集めて血痕のついた軍服姿で演説しました。「候補生たち、よく聞け。今暁二時、近衛師団は蹶起して宮城に入った。和平の詔勅は出されないことになった。それは俺の軍服の血が証明する」。こう森師団長を殺害して、帰校したことを告げたそうです。ですから大講堂で玉音放送を聞いた後も、「この詔勅は大御心ではない。君側の奸の仕業だ」と、上原の指示で生徒が兵器庫を襲って武器弾薬を奪うなど、騒然たる空気になりましたが、航空総軍司令官の河辺大将が十八日説得に乗り出し、上原が深夜割腹自決して平静に戻りました。逮捕されていた近衛師団参謀の石原少佐は、水戸航空通信学校の抗戦派三百人ほどが上京して上野の山に立て籠もると、十七日その説得を志願して山に入り、射殺されています。自ら死に場所を求めたのでしょう。

鈴木首相も十五日早朝、襲撃されました。横浜市内の警備隊に応召中の予備役陸軍大尉佐々木武雄が午前四時過ぎ、指揮下の一個小隊と自分の母校である横浜高等工業の学生ら四十人をトラックに乗せ、永田町の首相官邸を機銃掃射したのです。鈴木は五月二十五日の空襲で官邸の官舎が焼失してからは、小石川丸山町の私邸で寝泊りしていました。警護の巡査から聞き出して丸山町に向かいましたが、官邸の電話交換手が直通電話で私邸に急報、鈴木は間一髪、裏口から脱出出来たのです。佐々木は「国賊の家は汚らわしいから焼却する」と宣言し、ガソリンに火を点けて焼き払いましたが、この官邸・私邸の直通電話も三日前、十二日に開通したばかりなのですから、鈴木はつくづく運の良い人だったと思います。

佐々木たちは憲兵隊に自首しましたが、すでに憲兵解体が決まっていて、それどころではありません。学生ら民間人七人を警視庁に引き渡しただけで、佐々木ら軍人は放免してしまいました。学生たちは放火罪で実刑判決を受け、一年半ほど服役したと言われますが、佐々木の方は警視庁特別高等警察部が事件を引き継ぎ、岐阜県下に潜伏していることまでは突き止めたものの、今度は特高も十月二十一日に解体です。係官が一斉罷免となったため、捜査は打ち切られ、お構いな

しとなってしまいました。佐々木はその後、「大山量一」と名前を変え、財団法人「亜細亜友の会」を作って理事長となり、アジア各国の日本留学生のために寮の世話だとか、奨学金の斡旋などをしたそうです。

こうして、朝からジリジリするほど暑い八月十五日を迎えましたが、国民はどんな思いで正午の玉音放送を聞いたのでしょうか。

× ×

政府は八月十五日午前零時過ぎ、首相官邸の地下防空壕で記者会見を開いて、日本の終戦を発表しました。新聞記者は、みんな泣きながらペンを走らせたと言われます。十五日付朝刊の配達は、正午の玉音放送が終わるまでは一切罷りならぬということで、午後から夕方にかけてとなりましたが、新聞はこの「歴史的大転換」をどう受け止めたのでしょうか。昭和四十七年編纂の「毎日新聞百年史」が、その夜を実に生き生きと伝えていますので、紹介してみたいと思います。

「東京の編集局は押殺された静けさの中にこれを受けた」と書いています。この日だけは締切は午前三時に延ばされた。「聖断拝し大東亜戦終結 四国宣言受諾 万世の太平を開かん」という十五日の毎日新聞は、夏の夜の白むころまで輪転機が回り続けた。第一面は詔書をトップに内閣告諭、異例の御前会議、ポツダム、カイロ両宣言など、そして社説、二面には、原子爆弾ニュースがほとんど全面を埋めて特集された。何しろ国民には「新型爆弾」というだけで、原爆だということはそれまで隠されていたのです。内・蔵相の談話のほか、まだ「空母、巡艦大破」という大本営発表や、「B29中部、西部軍管区へ来襲」その他の戦況記事が掲載された。そして「新聞の百八十度転換は、見事に行なわれた。戦況記事は片すみにひっそりとかたまっていた」と書いているのです。

大阪本社については、当時社会部デスクで後に論説顧問になる藤田信勝が、日記「敗戦以後」にその夜の編集局をこう書いています。連絡部では、これは東京本社などとの連絡に当たるセクションですが、送稿して来る原稿を総がかりでとってゐる。整理部も、これは紙面の割り付けや見出しをつけるセクションで、今は編成部と言っていますが、全員配置についてゐる。むしろ冷静に仕事をつづけてゐる。降伏の新聞をつくるために、こんなに落ちついて仕事がつづけられるといふことをわれわれはかつて考へ得たであらうか。われわれはドイツの降伏のやうな降伏の形を考へてゐた。しかし、今われわれの眼前の事態はまるで違ふ。抗戦を主張した政府によって！宣戦を布告遊ばされた天皇陛下によって！そして必勝を叫びつづけた同じ新聞によって！いま静かに、何の抵抗もなく降伏が発表される。想像されなかった不思議な事態が、いまおこりつつある。

「藤田日記」は続きます。深夜近くになってポツダム宣言の全文が送られてきた。降伏の条件なのだ。連絡部長が速記者から渡される原稿を一枚々々受けとって「バカたれ！」とひとりごとしながらしきりに興奮してゐた。彼の息子は海軍特

攻隊にゐるはずだ。武装なき日本に、米、英、中国の武装軍隊が駐兵した時、果してどんな状態になるか。想像するだにそらおそろしい。新聞社は今日の形では存在することはできないであらう。新聞記者を一生の仕事して選び、新聞記者として働き、新聞記者として死ぬことをただ一つ人生の目的とした僕にとっても、すべてが終りになるかも知れぬ。整理部デスクの一人は「もうあすは出勤しなくいいんだらうな」と声を出した。とたん、編集局長の本田親男、後に社長になる本田から「あすもこいよ、今までどおり」の言葉がはね返ったそうです。

十五日の正午を前に、内地、外地を問わず、兵営でも工場でも、あるいは焼け跡の防空壕でも、みんなラジオの前に集まりました。正午の時報に続いて和田信賢アナウンサーが「只今より重大なる放送があります。全国聴取者の皆様ご起立下さい」。「君が代」の演奏が終わると、昭和天皇のやや甲高い独特なトーンの終戦を告げる言葉が、静かに抑揚を伴って流れ出したのです。雑音まじりで受信状態もよくなく、すぐには意味を理解出来なかった人も多かったようですが、放送が終わると、宮城前には続々と人々が押し掛けました。みんな目を泣き腫らし、石砂利に土下座したままの人もいましたし、慟哭は何時間も続きました。

しかし受けとめ方は、その人の立場、思想、また年齢によっても様々でした。作家の高見順の「敗戦日記」には、「『ここで天皇陛下が死んでくれとおっしゃったらみんな死ぬわね』と妻が言った。私もその気持ちだった。…やはり戦争終結であった。君が代奏楽、つづいて内閣告諭、経過の発表 ― 遂に敗けたのだ。戦いに破れたのだ。蝉がしきりと鳴いている。音はそれだけだ。静かだ」。山形の疎開先で聞いた歌人の斎藤茂吉は、日記に「ハジメニ一億玉砕ノ決心ヲ心ニ据エ、羽織ヲ著テ拝聴シ奉リタルニ、大東亜戦争終結ノ御詔勅デアッタ。噫、シカレドモ吾等臣民ハ七生奉公トシテコノ怨ミ、コノ辱メヲ挽回セムコトヲ誓ヒタテマツッタノデアッタ」。そして手帳には、「『五内為ニ裂ク』と宣ふみことのり すめら民は何をかまうさむ」の歌を認めています。

「熱涙滂沱として止まず、どう云ふ涙かといふことを自分で考へる事が出来ない」。こう書いたのは、随筆家の内田百間です。漫談家の徳川夢声は、畳の上で直立不動の姿勢で聞いたんだそうです。「足元の畳に、大きな音を立てて、私の涙が落ちて行った。私は或る意味に於て、最も不逞なる臣民の一人である。その私にして斯の如し。…日本敗るるの時、この天子を戴いていたことは、なんたる幸運であったろうか。私は歴代天皇の中で、この方ほど好もしきお人がらはないと信ずる」。私も、あの天皇あってこその終戦であった、と思います。

戦争中、「三年会」という「戦後日本を考える会」に加わり、早くからこの日あるを期していた東大工学部教授の富塚清は、日記にこう書いています。「来るもの遂に来れり。自分などにとり、これは覚悟の前だが、さて、この瞬間に臨んでみるとちょっと痛々しい気がする。何だか涙ぐましくなる。総理大臣の放送、これ

には、降伏の条件が述べられている。本州、四国、九州、北海道は残った。まずは万々歳である。一億玉砕にならずにすんだことは幸いである。昼食には、そばがきを食べる。瓜を入れた汁がうまい。新しい日の第一回の食事。のびのびとたべる。これからは一生涯、ウーウーの音を聞かずにすむだろう。これだけは、いくら慣れても、肺腑をえぐられるような、いやな音だった。風もなく至って平穏である」。そして奥さんに「今日は赤飯をたこうじゃないか。もっとも、敗戦を祝ったなんていうと人聞きがわるいから、名目は月おくれのお盆ということにするさ。本心は生き残ったことのお祝いということだがね」。結局、お砂糖なしのぼた餅にしましたが、夕食に家族が顔を揃えた時、誰言うともなく「おめでとう」と言い合っていたそうです。

評論家で作家の加藤周一さんは、東大内科の医師をしていて、信州上田の結核療養所で放送を聞きました。「数十人の看護婦たちは ― みんな土地の若い娘であった ― 何ごともなかったかのように、いつもの昼食の後と少しも変らず、賑かな笑い声を立てながら、忽ち病室の方へ散っていった。戦争は遂に ― どんな教育にかかわらず、またどんな宣伝にもかかわらず、娘たちの世界のなかまでは侵みこんでゆかなかったのである。…今や私の世界は明るく光にみちていた。夏の雲も、白樺の葉も、山も、町も、すべては喜びに溢れ、希望に輝いていた。私はその時が来るのを長い間のぞんでいた。しかしまさかその時が来ようとは信じていなかった。すべての美しいものを踏みにじった軍靴、すべての理性を愚弄した権力、すべての自由を圧殺した軍国主義は、突然、悪夢のように消え、崩れ去ってしまった ― とそのときの私は思った。…私は歌いだしたかった」。「貧乏物語」の作者河上肇は病床にあり、翌年の二十一年一月には亡くなりますが、「あなうれし とにもかくにも生きのびて 戦やめるけふの日にあふ」と歌っています。

子供の世界は、素早く希望を見つけ出していました。漫画家の手塚治虫は十六歳でしたが、「家の外で話し声がする。『戦争が終わったんですって』『まあ、ほんと』ゲッとなってラジオを大きくした。 ― 敗戦だ！ ― 終わったんだ、終わったんだ ― ぼくは、とっさに、こりゃ、もしかしたら漫画家になれるかもしれんぞ、と思った」。大阪大学医学部在学中、アルバイトに描いた漫画が貸本屋のベストセラーとなり、やがてストーリー漫画の第一人者として「鉄腕アトム」、「ジャングル大帝」など、子供たちにどれだけ夢と希望を与えたことでしょうか。

信州に疎開していた目黒区月光原小学校の「学童疎開の記録」には、こうあります。「先生方は応接室に集まり、ただ放心したようにだまった別れた。寮へ帰ってみると、いつもより子供たちの顔は明るく、敗戦のくやしさは少しもない。ずるそうに私たちの顔を見ている。だれいうとなく『家に帰れるそうだ』、何のあてもない生活に明るい希望が湧いたのだろう。むっつりだまり込んでいる先生方に気がねしながらも、子供たちの身動きの端々に『張り』が出てきたようだ」。そう

言えば、私も勤労動員が終わって、九月一日から再開された中学校へ顔を出した時、まずびっくりしたのは、野球好きの仲間たちが校庭いっぱいに広がって、キャッチボールをしていることでした。そして私も、ほんの半月前、玉音放送を聞いて地球が消滅したようなショックを受けたことも忘れて、来年五月の中学の創立記念日に自分たちの芝居をやろうと、脚本を書き始めるのです。

玉音放送の直後から、「戦後」も始まっていました。東大学長になる林健太郎さんは、一高の教授をしていた三十一歳の時に二等水兵として横須賀海兵団に入隊しましたが、敗戦と分かると、「とたんに兵営内の空気は一変した」と、「昭和史と私」に書いています。「急にいろいろな物資が配給され、夜は至る所で酒宴が開かれて歌声が兵舎に響き渡った。敗戦を喜んでいるのでもなく自棄になっているのでもない。要するに急に自由になったので、出来ることでしたいことを先ずしたということだろう。その中をトラックが音を立てて走り回った。最初は意味がわからなかったが、下士官あたりの海兵団の実力者が酒保の物資を持ち出して、後日の闇商売に使ったということだった」

作家の安岡章太郎さんが十五日の午後一時頃、新宿へ出ると、いつもなら尾津組の露店が並んでいて、針だの櫛だの安全剃刀を売っているのに、敗戦で自粛したのか一軒も出ていません。ところが裏通りに回ると、電柱の陰に薄汚れた手拭いを頭に巻いた男がいて、小柄な老人から金を受け取ると小さな紙包みを渡します。安岡さんがポケットにあった二十円をその男に渡したところ、隠すように手渡したのが煙草の「光」。煙草はもう一週間に一箱ぐらいの配給で、愛煙家には大変な貴重品でした。「真っ昼間、専売局のちゃんとした煙草を公道で売っているのは、やっぱり戦争が終わった証拠だな」と思ったそうです。安岡さんは「僕の昭和史」に、「翌日も朝から晴天だった。新宿駅の雑踏はひどく、きのうは自粛していた尾津組の露店も表の電車通りに沿って立ち並び、その周りに盛り場の活気めいたものが漂っていた」と書いています。

毎日新聞編集総長の高田元三郎は、玉音放送が終わった後、東京本社の社員会議を開いて、「新聞人の責任と自覚」を訴えました。毎日は「社報号外」を出して、高田の言葉を全社員にこう伝えています。「いまわれわれは戦には敗れましたが、この大きな戦訓を活かして、よしわれわれの時代に皇国の再建が不可能であっても、われわれの次の時代において立派にこれができる基礎を、今日只今からこの焦土の上に築き上げねばならぬのであります。これがわれわれに残された大きな義務であり、使命であります。国民はこれから暗夜の道を行くのであります。暗夜の行路を行く国民に燈火を与へるものは、誰でありませうか。私は新聞であり、新聞人であると信じます」

翌日十六日付の大阪本社社会面トップに、「今日も明日も筆をとる！」。この日の覚悟を高らかに書いたのは、三十八歳の報道部記者井上靖でした。「玉音ラジ

オを拝して」と題する原稿は、「十五日正午 ― それは、われわれが否三千年の歴史がはじめて聞く思ひの「君が代」の奏でだった」。こう始まっています。「日本歴史未曾有のきびしい一点にわれわれはまぎれもなく二本の足で立ってはゐたが、それすらも押し包む皇恩の偉大さ ― すべての思念はただ勿体なさに一途に融け込んでゆくのみだった」。そして「詔書を拝し終るとわれわれの職場毎日新聞社でも社員会議が二階会議室で開かれた。一億団結して己が職場を守り、皇国再建へ発足すること、これが日本臣民の道である。われわれは今日も明日も筆をとる！」と力強く結んだのです。井上は原稿を整理部デスクに渡す時、言ったそうです。「この記事を書くために俺は新聞社に入って来たんだ。そして、いま、これを書いた。もう、これでいい。これ以上のものを書くことがあろうとは思わぬ」

― 井上が学芸部勤務のかたわら、小説「闘牛」で芥川賞を受けたのが昭和二十四年、退社して作家活動に専念するのは二年後の二十六年でした。

毎日新聞は戦争中、「竹槍事件」で危うく廃刊に追い込まれようとしています。戦局が悪化した昭和十九年二月二十三日付の朝刊に、「勝利か滅亡か 戦局は茲まで来た 竹槍では間に合はぬ 飛行機だ海洋航空機だ」。こう書いたのは、海軍省担当キャップ新名丈夫記者でした。陸軍が家庭の主婦まで動員して、竹槍訓練をさせている時です。「敵が飛行機で攻めてくるのに、竹槍では戦えない」。誰が考えても当然至極のことを書いたのですが、東条英機首相は「陸軍の作戦をバカにした」と激怒しました。極度の近眼で兵役免除になっていた三十七歳の新名記者を、二等兵として懲罰召集すると共に、情報局に毎日新聞の廃刊を迫ったのです。結局は編集局長の辞職、発禁処分で済みましたが、とにかく戦争中は軍部の要求、その意向に沿ったもの以外は、何も書けなかった時代でした。それが今、やっと終わったのです。太平洋戦争が始まって三年八か月、盧溝橋事件から数えれば実に八年一か月も続いた戦争が終わり、新聞だけではなく、誰もが自分の主張を自由に訴えることの出来る時代がやって来たのです。

しかし、玉音放送が終わった後も、特攻機は飛び立って行きました。十五日の夕方、海軍の第五航空艦隊長官宇垣纏中将が大分基地から艦上爆撃機の「彗星」十一機を率いて、沖縄へ特攻攻撃をかけたのです。海軍総隊はその朝、「沖縄積極攻撃中止」の命令を出していましたが、宇垣は日記「戦藻録」に「最後迄戦うべきに本指令は我意を得ざるなり」と書いています。当直参謀に「艦爆隊を直率して沖縄に出撃するから、彗星五機を用意するように」命じたのですが、参謀長が説得しても、「俺に死に場所を与えてくれ」。宇垣は昭和十八年四月、連合艦隊長官山本五十六がソロモン基地視察の途中、米軍機に撃墜されて戦死した時の参謀長です。「山本長官は私が頃下も同然だ。私が視察に行くなどと言い出さなければ、何事も起こらなかったのだ」。こう言い続けていたそうですが、沖縄戦の特攻にも多くの部下を送り出していて、その後を追う積もりだったのでしょう。

玉音放送の後、中津留達雄大尉に出撃命令が出され、食堂でささやかな宴席が用意されました。日記に最後の筆を走らせていた宇垣は、「一六〇〇幕僚集合、別盃を待ちあり。之にて本戦藻録の頁を閉ず」と書いていますが、飛行場で宇垣を待っていたのは、五機ではなく十一機、二十二人の搭乗員でした。宇垣が「五機のはずだが…」と言うと、中津留は「長官が特攻をかけられるのに、たった五機とき何事ですか。私の隊は全機でお供します」。「彗星」は復座、二人乗りですから、宇垣が「操縦員だけでよい、偵察員は残れ」と言っても、偵察員は「私たちは操縦員と生死を共にして訓練して来ました。私たちだけが残ることは出来ません」と、口々に訴えます。こうして午後五時、「彗星」十一機が飛び立ち、三機が故障で引き返しましたが、宇垣の乗った中津留機など八機十七人は戻りませんでした。中都留機の突入電報と共に、宇垣が出撃前に用意した電文「皇国武人ノ本領発揮、驕敵米艦ニ突入轟沈ス」が、指揮下の各部隊に打電されたのです。

海軍総隊長官小沢治三郎中将は、報告を受けて激怒しました。「軍の指揮系統は大命の代行であり、私情を以て一兵たりとも動かしてはならぬ。玉音放送で大命が下されたのち、部下を道連れにするなど以ての外。自決して部下の後を追うと言うなら、一人でやれ」。私も、その通りだったと思います。もう死に急ぐ必要はなかったし、死に場所を求める必要もなかったのです。敗戦のショックで茫然としている若い隊員たちが、長官が行くと言えば、みんな志願するのは分かり切ったことでした。中津留大尉は海兵七十期、二十三歳、前月に長女が生まれたばかりでした。みんな、まさにこれからの若い命なのです。特攻の戦死者は二階級特進することになっていましたが、中津留たちは一階級進んだだけ、宇垣の場合は大将に進級することもなく中将のままでした。玉音放送後の出撃が、この処置になったのでしょう。

十六日になると、海軍厚木基地の戦闘機が東京に飛んで来て、「国民諸子ニ告グ 海軍航空隊司令」という、徹底抗戦のビラ数万枚をばら撒いたのです。「詔勅は必勝の信念を失った重臣、閣僚たちの仕業だ」として、「天皇ノ軍隊ニ降伏ナシ、我等航空隊ノ者ハ必勝ノ確信アリ」、そして「今コソ一億総蹶起ノ秋ナリ」と結んでいましたが、翌日には北海道、九州にも撒布され、この「厚木起つ」のニュースは全海軍を衝動させました。厚木の第三〇二航空隊は零戦、月光、彗星、銀河など百七十機、人員五千五百人を擁する帝都防空部隊です。地下格納庫や弾薬庫には、二年は持つと言われた豊富な弾薬、食糧を備蓄しており、この航空部隊が徹底抗戦に踏み切ったら、終戦など吹き飛んでしまう恐れがありました。

司令の小園安名大佐は歴戦の戦闘機パイロット。皇国史観の平泉東大教授の熱烈な信奉者で、若い時から神懸かりの精神家としても知られていました。玉音放送を聞き終わると、炎天下に整列した隊員にこう呼びかけたのです。「日本の軍隊は解体したものと認める。これからは、各自の自由意志によって国土を防衛す

る国民的自衛戦争に移ったわけだ。私と共にあくまで戦う者は留まれ、しからざる者は帰郷せよ」。隊列を去る者はなく、厚木基地は一致して戦闘態勢に移り、午後二時、指揮所の吹き流し塔には「菊水」の旗が掲げられたのです。

厚木基地は、連合軍が進駐して来る場合の玄関口です。海軍は懸命に説得しましたが、小園は頑として聞きません。ついには解任しましたが、十六日深夜、ラバウル時代にかかったマラリアが再発し、高熱を出して倒れたのです。十八日朝にはフンドシ姿で外へ出て、「俺は天照大神だ」などと叫んだものですから、軍医が麻酔薬を注射して寝かせつけました。小園は二十一日朝、三浦半島の海軍病院精神病棟に収容され、三〇二空挙げての抗戦態勢は、指揮官を失って急速に崩れていきました。それでも納得しない若手士官、下士官など三十二機が、陸軍の狭山、児玉飛行場に脱出しましたが、これも説得されたり、タイヤを切られて飛行不能にされたりして、厚木の反乱は二十六日には終息したのです。

小園は十月、横須賀鎮守府の臨時軍法会議で無期禁固の判決を受け、その後減刑されて仮釈放になったのは昭和二十五年の暮れでした。悲しい自決もありました。飛行長の山田九七郎大尉が小園入院の翌日、奥さんと服毒自殺したのです。山田は愛する女性を、小園の養女として結婚していました。陸海軍将校の結婚には厳格な身元調査があり、例えば遊廓の女性には許可が出ませんから、然るべき人の養女として届け出るんだそうです。山田大尉の奥さんにどんな事情があったのかは分かりませんが、ただならぬ小園の恩顧と、聖断に従わなければという気持ちの板挟みになって、夫婦で自決の道を選んだのでしょう。

そして、阿南陸相を皮切りに、自決者が続いたのです。大将から二等兵に至るまで、民間人を入れると六百人を超えたと言われます。神風特攻隊生みの親、大西瀧治郎軍令部次長が官舎で割腹したのは十六日未明でした。手当てしようとする軍医に、「生きるようにはしてくれるな」と頼みましたが、もう腸がはみ出していて手の施しようがありません。大西は聖断前日の十三日深夜、首相官邸で東郷外相、梅津、豊田両総長が話し合っているところへ来て、「今からでも二千万人を殺す覚悟で、これを特攻に用いれば決して負けることはない」と迫ったばかりでした。二千万と言えば、当時の働き盛りの男子の総数です。狂気に取り憑かれていたとしか思えませんが、「特攻隊の英霊に曰す」で始まる遺書は、「善く戦ひたり深謝す …吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす」。そして「次に一般青壮年に告ぐ」として、「我が死にして軽挙は利敵行為なるを思ひ 聖旨に副ひ奉り自重忍苦するの誠とならば幸なり 隠忍するも日本人たるの矜持を失ふ勿れ 諸子は国の宝なり 平時に処し猶ほ克く特攻精神を堅持し 日本民族の福祉と世界人類の和平の為最前を尽せよ」と書いています。

急報で駆け付けた児玉誉志夫、政界の黒幕としてロッキード事件で起訴された児玉は、戦争中海軍航空本部の物資調達組織「児玉機関」の機関長をしていて、大

西とは懇意の間柄でした。大西は「貴様のくれた短刀が切れないばかりに、貴様とまた会えた」。こんな軽口を叩きながら、「厚木の航空隊を抑えてくれ。小園に軽挙妄動を慎めと、大西が言ったと伝えてくれ」と頼んでいるのです。責任をとって死ぬのは、自分一人でいい。この思いだったのでしょう。苦痛に呻きながら絶命したのは午後六時頃。辞世は「之でよし百万年の仮寝かな」でした。

特攻関係者の死は続きます。フィリピンで陸軍最初の特攻を実施した第四航空軍の参謀長隈部正美少将が十五日、家族四人を道連れに。翌日には、陸軍特攻機の爆装計画を担当した水谷栄三郎大佐が自決しました。人間爆弾とも言うべき海軍の「桜花」を考案した大田正一中尉は、十八日昼すぎ「零戦」に乗って鹿島灘方面へ飛び立ったまま、帰って来ませんでした。大田は昭和三年海兵団入隊の叩き上げ。戦局挽回に一人乗りの木製小型機に千二百キロの爆弾を搭載し、一式陸上攻撃機の胴体に吊して敵艦に体当たりさせる、必中兵器を考案したのですが、アメリカ機動部隊が沖縄に迫った三月二十日、「桜花」十五機を搭載した一式陸攻十八機は、目標到達前に全機撃墜されてしまいました。責任を感じ続けていた大田は、海に突っ込んで死んだのでしょう。

宮城事件を鎮圧した東部軍司令官田中静壱大将が自決したのは、八月二十四日の深夜です。その日早朝、埼玉県寄居の陸軍予科士官学校生徒六十人余りが、川口の国際無線放送局を襲撃したという報告を受けると、田中はすぐ車を走らせました。海外に向けて徹底抗戦を放送しようとしたのですが、田中は生徒に天皇苦悩の言葉を引いて、「日本の復興のために尽くせ、諸子の前途は永い」と懇々と諭したのです。田中は立派な軍人でした。昭和十三年と十五年の二回、憲兵司令官を務めていますが、「憲兵は無色透明でなければいけない」。常々こう言って、国民に公権力をを使って弾圧することのないよう、戒めていたそうです。

田中は生徒を引き揚げさせると、第一生命ビルの司令官室に戻り、近衛師団鎮圧の際、天皇から賜った言葉を清書し、懐に収めました。「今朝ノ軍司令官ノ処置ハ誠ニ適切デ深ク感謝ス。今日ノ事態ハ真ニ重大デ、色々ノ事件ノ起ルコトハ固ヨリ覚悟シテ居ル。併シカクセネバナラヌノデアル。田中ヨク頼ム。シッカリヤッテ呉レ。声涙共ニ下ラセ給フ。八月十五引午後五時十五分 於・御文庫」。こう書かれた紙は、田中が心臓を撃った際の血で滲んでいましたが、各軍司令官、部隊長に宛てた遺書には、自分が将兵一同に代わりお詫びして皇恩の万分の一に報ずること、全将兵が自重自愛して軽挙を慎み、国の復興に邁進することを切望し、「聖恩の忝けなきに吾は行くなり」の辞世で結ばれていました。

立派な軍人と言えば、終戦から二年余り経った昭和二十二年九月十日、ラバウルの戦犯収容所で自決した第十八軍司令官安達二十三中将もそうでした。この変わった名前は明治二十三年生まれだからで、陸軍の将軍だった二人の兄さんも、生まれ年そのままに十六と十九だったそうです。第十八軍が戦ったニューギニア

は、十四万将兵のうち戦死実に十一万人。それも大部分が食べるものがないための餓死と、マラリアによる戦病死という、太平洋戦争で最も悲惨な戦場でした。安達は部下の戦犯裁判の弁護、証言に尽力し、部下の行為は自分の責任であるとして無期禁固の判決を受けましたが、第十八軍に関する一切の裁判が終了したのを見届けて自決したのです。それも、軍刀をはじめ刃物を全て取り上げられた中で、金鋸で秘かに作った長さ十二㌢ほどのナイフで、作法通りに腹を切った後、確実に死ねる方法として首を吊ったのだそうです。辞世は「北の空に冴ゆる月影眺めけり　月は南と思いしものを」でした。

高級軍人では、第一総軍司令官の杉山元元帥が九月十二日、軍司令部で拳銃自決し、自宅で連絡を受けた啓子夫人も短刀で後を追っています。満州事変当時の関東軍司令官本庄繁大将が割腹自決したのは、戦犯に指名された十一月二十日でした。開戦時の首相東条英機はそれより先、ＧＨＱが戦犯容疑者逮捕に乗り出した九月十一日、拳銃で左腹部を撃ちましたが、駆け込んだＭＰにより救出され東京裁判で絞首刑になったのは、皆さんご存じの通りです。閣僚経験者では、陸軍軍医中将の小泉親彦元厚相が九月十三日割腹自決、翌日には橋田邦彦元文相が服毒自殺しています。そして元首相の近衛文麿が戦犯に指名され、荻外荘で服毒自殺したのは十二月十六日でした。近衛も終戦に努力した一人でしたが、首相としての近衛はいつも優柔不断でした。遺書にはこう書いています。「僕は支那事変以来多くの政治上過誤を犯した。之に対し深く責任を感じて居るが所謂戦争犯罪人として米国の法廷に於いて裁判を受けることは、堪え難いことである。殊に僕は支那事変に責任を感ずればこそ、この事変解決を最大の使命とした。そしてこの解決の唯一の途は米国との諒解にありとの結論に達し、日米交渉に全力を尽したのである。その米国から今犯罪人として指命を受けることは誠に残念に思う」

柴五郎陸軍大将、もう大正十二年に予備役になっていて、この戦争には全く責任がありませんが、九月十五日に自決を図り十二月二十三日、八十六歳の生涯を閉じています。明治三十三年の義和団事件で北京の各国公使館が包囲された時、清国公使館付武官をしていた柴中佐は見事な指揮で籠城戦を戦い抜き、ロンドン・タイムズの特派員モリソン記者の報道により、欧米の新聞には連日「カーネル柴」の大見出しが躍ったものでした。イギリスが明治三十五年に日英同盟を結んだのも、規律正しく勇敢な日本兵に対する信頼が、大きな要素になったと言われています。その柴は、「残念ながら、この戦いは負けです。日本は、信用と面子を尊ぶ中国人をさんざん裏切った」と、言い続けていたそうです。

満州映画協会の理事長になっていた元憲兵大尉甘粕正彦が、理事長室の黒板に「大ばくち　もとも子もなく　すってんてん」。こう書いて青酸カリ自殺をしたのは八月二十日でした。麹町憲兵分隊長の時、関東大震災の混乱に乗じて無政府主義者の大杉栄ら三人を殺害、軍法会議で懲役十年の判決を受けましたが、昭和二

年には出獄して満州に渡り、満州事変など数々の謀略工作に従事した人物です。ただ死ぬ前に、社員の家族を満州から脱出させるための列車を用意し、満映の預金を全て引き出して、重役から給仕に至るまで、一千人の職員全員に一人五千円ずつの退職金を払ったと言われます。右翼の集団自決も続きました。愛宕山に立て籠もって、「バドリオ内閣を倒せ」と気勢を挙げていた尊攘同志会の十人は、警視庁が実力解散に踏み切った八月二十日の夕方、手榴弾を爆発させて全員が自決、五日後には未亡人二人が同じ場所で後追い自殺をしています。

鈴木内閣は十五日午後、一切の終戦手続きを終えて総辞職しました。昭和二十[illegible]七日に組閣して以来百三十三日。天皇は鈴木に「ご苦労をかけた。本当によくやってくれたね」と、ねぎらいの言葉を二度繰り返されたそうです。十七日[illegible]日本の内閣制度始まって以来初めての皇族内閣東久邇内閣が発足しましたが、十[illegible]朝、降伏打ち合わせのため、河辺参謀次長を団長とする十七人の使節団がマニラに派遣されました。まだ厚木の反乱が続いている時で、撃墜される恐れがあるということで、比較的平穏な木更津基地から二機の爆撃機に分乗、ひたすら南へ飛んで遠回りをして向かったと言われます。

連合軍最高司令官マッカーサー元帥の厚木到着は、台風のため遅れて二十七日になりましたが、九月二日には東京湾の戦艦ミズーリ号艦上で降伏文書の調印式が行なわれることになったのです。日本側全権は政府を代表して重光葵外相、軍部を代表して梅津参謀総長です。陸海軍省と外務省の随員三人ずつ、総勢十一人の全権団は、二日午前四時首相官邸に集まり、東久邇首相以下閣僚に出発の挨拶をしました。外務省随員の加瀬俊一さんは、「挨拶というより、訣別という感じが強かった。途中で意気盛んな少壮将校に襲撃されるかも知れないし、我々が終戦の人柱に――そういう心境だったから、冷酒の乾杯もさながら水杯を酌み交わす趣があった」。こんなことを話していますが、横浜港の埠頭には出迎えの駆逐艦ランスダウン号が待っていました。艦長のスミス・ハットン大佐は開戦時、東京のアメリカ大使館付武官。加瀬さんとは家族ぐるみの付き合いをした仲で、そんなアメリカ側の配慮が嬉しかったそうです。

ランチに乗り移りミズーリ号に接舷しましたが、重光は中国公使の昭和七年、上海で朝鮮独立運動家に爆弾を投げられて右足を失い義足です。容易でないと見たハットン大佐は、「力自慢の者四人を集めろ」と命令します。たちまち屈強な水兵が重光を抱き抱えましたが、ミズーリ号では黒山の水兵が歴史的な場面を撮ろうとカメラを構えています。重光は威厳を傷つけるような写真を撮られては、国家の名誉を損なうと心配したのでしょう。加瀬さんに「撮影しないよう断ってくれ」。ハットンに申し入れると、即座に撮影禁止を命令してくれたのです。海軍随員の軍令部作戦部長富岡定俊少将は、「どんな侮辱的な扱いを受けるか覚悟していたが、大分見当が違ったぞ」と、心を打たれたそうです。

式場には、嘉永六年、一八五三年のペリー提督来航の際の古い星条旗が掲げられていました。マッカーサーは無造作な軍服姿でマイクの前に立つと、「理想や理念の紛争はすでに戦場において解決された」と前置きして、演説を始めました。

「我々は猜疑や悪意や憎悪の気持ちに促されて、今日ここに相会するものではなく、過去の流血と破壊の中から、信頼と理解に基づく新しい世界を招来しようと切に念ずるものである」。そして自由と寛容と正義の精神を強調し、「占領軍最高司令官の義務を寛容と正義によって履行する決意である」と、格調高く結んだのです。富岡は「この時までの私は、心から降伏はしていなかった。しかし、マッカーサーの恩響の彼方にある大らかな気持、それに引き替え何と小さな島国根性だったかと、心の底から打ちのめされた気持だった。ペリー提督の星条旗を飾った心が、初めてわかった」と話しています。

午前九時四分、重光、梅津が漢字で署名し、マッカーサーはじめ戦勝国代表も次々と署名して調印式は終わりました。全権団は再びランスダウン号で横浜港に向かいましたが、上空にはB29と艦載機が飛び交い、「対日戦勝利の日」を祝っています。その轟音の中から、マッカーサーの本国向け放送が流れて来ました。日本についてその将来を期待し、「日本民族の才能が建設的に活用されれば、必ず現在の悲境から脱出して、尊敬に値する国際的地位を回復するであろう」と言っているのです。加瀬さんは調印式の経過を報告書に纏めましたが、その最後を「もし日本が勝っていたら、果たして今日マッカーサー元帥がとった態度をアメリカに対して示し得たでしょうか」と、結んだのです。

加瀬さんは言っています。「支那事変以来、わが軍は陸に海に空に善戦し、国民も犠牲を忍んでよく困苦に堪えたのに、ついに敗戦の憂き目を見たのは、敵の巨大な物量に圧倒されたからだけではない。それもさることながら、それよりも軍部の暴走を許した国民倫理に大きな欠陥があった。いま敗戦によって国民がこの事実に思い至れば、それがとりも直さず、再起の大道に連なるのである。元帥の演説は、暗黒を貫く一筋の光明だったといってもよかろう」

鈴木貫太郎は昭和二十三年四月十七日の未明、父祖の地である千葉県関宿で胃癌により八十一歳の生涯を閉じました。枕元に親族縁者が集まった時、うわごとのように、しかし非常にはっきりした声で「永遠の平和、永遠の平和」と、二度繰り返したと言われます。戦後六十六年、戦争は一度もありません。これほど素晴らしいことはないでしょう。同時に、あの戦争は何であったのか。この思いが強く残ります。死者が陸軍百十四万四百二十九、海軍四十一万四千八百七十九、一般国民二十九万九千四百八十五と計百八十五万四千七百九十三人。負傷不明六十七万八千二百三十二人を入れると二百五十三万三千二十五人にもなります。国富の被害も終戦時の時価で六百五十三億円。なぜ、あんな馬鹿な戦争をしたのか、そしてどこかで防げなかったのか。来月は、このことを検証してみます。